おやじの会は参加者に“ケア”をもたらすのか

清水　憲志（中国短期大学）

1.問題と目的

昨今、少子化や家、保育現場での虐待等様々な子どもに関わる問題があり、子育て環境の整備が求められている。子育て環境の一環として母親を主体として、子育て支援が次第に広がってきているが、父親を対象としたものは少ない。佐々木（2000）でも語られたように、父親も育児を行うことが親として望ましいため、その父母の養育に対して十分な支援を行い、家庭や子育てに夢を持ち、子育てに伴う喜びを実感できる社会環境を整備する必要がある。おやじの会という父親を中心にしながら、志が同じ仲間で活動する親集団がある。

支援の形としては、“持続可能”な形で子育て支援が行われ、今の親世代も子育てを楽しみ、育てられた子どもも自分達は尊重されていると感じながら未来に期待が持てるような、育て・育てられるということが循環する必要がある。

その環境に期待するものとして、メイヤロフ（1987）が提唱する“ケア”という価値観である。“ケア”を「他者を自分自身の延長と感じる。また、独立したものとして成長する欲求を持っているとものとして感じる」と述べ、他者と自分が共に成長することを幸福と捉えている。地域で生活するものが“ケア”の精神を持って相互に関わる事が必要だと考える。

おやじの会に参加する父親が活動を行う中でどのような“ケア”をもたらし、もたらされているのかを明らかにする。

2.研究方法

「全国おやじサミット」の関係者及び筆者と 10 年ほど前から関わりのあるおやじの会の関係者等を通じて,インタビュー及び事例収集の協力を依頼し、ZOOM 及び対面で父親 9 名に半構造化面接に基づくインタビューを行った。調査時期は 2022 年 5 月～11 月に実施した。活動場所はそれぞれ北海道、埼玉、東京、兵庫等であり、結成及び参加した当初は学区に拠点をおいて活動していた。その後、地域に移行した者、地域と学区それぞれに属している者がいた。

3.結果

インタビューデータについて MAXQDA2022 を用いて分析した結果、“学校活動から地域活動へのケア”(30 事例)、“大人から子どもへのケア”（21 事例)、“自らへのケア”（27 事例）に関することが明らかになった。

それぞれに関して、個人が実感している部分に関しては、差が見られるものの、様々な学校での活動を行う中で地域行事などを結び付けるような意識に基づく学校活動と地域活動をつなげようとするケアや仲間からの励ましなどによる自らへのケア、色々な大人から参加している子どもへの我が子同様に大事にするケアが見られた。

また、活動を通して、自分一人ではできないことを仲間と共にすることで達成しようとする意識が読みとれた。そのため、父親達は活動に自己及び他者を成長するための意識や人と住む地域を結び付けるような“ケア”があることが分かった。

【参考文献】

・佐々木保行, 大日向雅美, 平塚裕子, 窪田信子, 森和子, 山口亜希子 2000「日本における最近 10 年間の父親研究の動向」,『鳴門教育大学紀要』(15) , 鳴門教育大学
・ミルトン・メイヤロフ,田村真 , 向野宣之 1987,『ケアの本質: 生きることの意味』, ゆみる出版

キーワード : おやじの会、ケアリング、家族